



オウトウ (サクランボ)

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
[6月下旬 ～7月始め] 収穫直後の 礼肥	<p>根の活力強化 樹勢を早急に回復させ、 秋の養分蓄積、枝・花芽 の充実を図る</p> <p>ここが非常に大切な時期</p> <p>秋3ヵ月間の体力を支える 肥料なので、20kgずつ施 す事を推奨</p>	<p>収穫直後に、根っ酵素2～5ℓを適宜薄めて(300倍前後)タツプリと 灌水→秋根を伸ばして養分蓄積へ。 または500倍で葉面散布(特に葉が薄いか、傷んでいる場合)</p> <p>上記より7～14日おき(7月中下旬)、必ず土を掘って根が伸びている状態を確認し、かつ土のpH・ECを測定してから、礼肥として、下記3種を同時に散布。</p> <p>●硫安10～20kg ●畑の大将<青>10～20kg ●マンゾク粒状20kg ※7月後半～8月の花芽分化期には、樹勢があり、かつカルシウムが効いた状態にしておく事が大切。原則として必ず、硫安とカルシウムを同量・同時に施す。カルシウムによって秋の養分蓄積、枝の充実が進む。 ※硝酸のようなデンプンを消耗させる肥料は絶対に不可。 ※マンゾク粒状は根を強く動かせ、樹勢を強化。 (これだけは遅らせて8～9月施用可)</p>
[11月～12月] 元肥 (地力作り)	<p>翌春の基礎を作る栄養 の準備 (普通は12月の休眠期に)</p> <p>※11月の落葉期に施すと、 動いている根が吸収し、 凍害に強くなる 特にカルシウムが効果 的(N過多はダメ)</p>	<p>●ラクトバチルス600g →深層まで排水・通気の良い土に。 ●有機物・堆厩肥1～2トン(または米ヌカ150kg以上) ●硫安60kg(佐藤錦・基準) ※特に痩せ地で有機物が不十分なら 硫酸カリ20kg追加。 ※有機配合肥料を使う場合は NPK=12-2-5kg程度。 ●畑の大将<青> 30kg ※カルシウム栄養は、合計量で硫安と同量をしっかり投入するが、半量は春先にまわすのが効果的。(土壌pH:5.8～6.5に) ※上記4種を同時に施して、耕す。(土と軽く混ぜる) 施肥位置は根の届く先の遠くまで均一に。</p>
[4月] 春根が動く	<p>根の動きは前年の樹の 体力による。必ず掘って 見る事。普通は施肥しな い時期だが、ここが大事!</p>	<p>4月始めから、春根がしっかりと伸びて活動している事。 ●マンゾク粒状20kg →根を強く動かし発芽・開花を促進。 (または根っ酵素3ℓ 灌水) ●畑の大将<青> 30kg →開花を強く、着果を確実に。 ※もし元肥時に不十分なら、硫安20kg追加。 ※4月中に土のpH・ECを測って調節する事。</p>
[4月下旬 ～5月上旬] 発芽・開花期	<p>発芽・開花は短期間に一</p>	<p>【花芽の特徴】花の主体は、2年枝(前々年枝)の中部に着いた花束状短果枝の、頂芽だけ葉芽、腋芽が全て花芽。1花芽に3～6個、花だけが着く(純生花芽)。つまり前年枝に着果する訳なので、前年の栄養状態が非常に大きく影響する。1年枝(前年伸長枝)の基部の花芽は、秋の枝がよほど充実していなければ弱い。礼肥のカルシウムが効けばかなり強い。</p>
[5月後半～6月] 肥大・成熟期		<p>開花(受粉)10日後、根っ酵素 →果実細胞肥大の促進。 収穫25日前、花咲くCa液 →果実への転流促進。 収穫15日前、花咲くCa液 →成熟促進。 ※開花(受粉)～成熟の日数は中生種で40日。 ※雨水が果皮の気孔から入って実割れを起すのを避けるために「雨よけ」被覆。カルシウムは裂果を減らす。また灰星病や果実腐敗を蔓延させない。</p>